

(書式1)【候補者用】

① 立候補者の 姓名と所属	村上道夫 大阪大学感染症総合教育研究拠点科学情報・公共政策部門
② 立候補の理由と 抱負 (400 字程度)	<p>新型コロナウイルス感染症に伴う様々なリスク課題の顕在化とともに、学際性や社会実装との親和性といったリスク学の意義を再認識しています。第 17 期 (2020 年 7 月～2022 年 6 月) の役員立候補の際には、日本リスク学会の中で私が貢献したいこととして、①学際性・俯瞰性の更なる発展、②社会との協働に関する学術的評価を高めること、③日本リスク学会の知を広く、社会と共有すること、を挙げました。第 17 期の任期中には、著者、査読委員、編集委員をはじめとする学会員の皆様の多大なご協力のもとで、編集委員長として、リスク学研究の定期刊行を果たし、学際性に富み、研究成果の社会実装にかかわる論文の掲載や社会との知の共有に貢献してまいりました。多数の学会誌が刊行され、JST によるプレプリントサーバの運営が始まる中、これまで以上に学会内外に波及性のある雑誌としてリスク学研究のプレゼンスを発揮することは、日本リスク学会の重要な役割の一つです。リスクに関する知を深め、社会と共有し、課題解決へとつなげるべく、力を尽くします。</p>
② 本学会における活動歴	<ul style="list-style-type: none"> ・日本リスク学会の第 17 期役員 (法人第 6 期：2020 年 7 月～2022 年 6 月) の理事として、編集委員長を務めた。リスク学研究の年 4 回の刊行、特集企画の立案、投稿規定の改定等に貢献した。 ・2018 年度第 31 回日本リスク研究学会年次大会にて、実行委員長を務めた。本大会では、多数の参加者が集まったことに加え、大会の特集論文も複数号にわたって掲載された。 ・2021 年度第 34 回日本リスク学会年次大会にて、実行委員 (理事会委員) を務めた。 ・日本リスク研究学会レギュラトリーサイエンスタスクグループ (TG) にて、第 1 期 (2014 年～2016 年) の主要メンバー、第 2 期 (2017 年～2019 年) の共同代表、第 3 期 (2020 年～2022 年) の共同代表を務めた。第 3 期の次期リスク学事典に関する TG の共同代表、原子力災害の防護方策決定の正当化に関する検討 TG の主要メンバーとして活動した。 ・年次大会企画セッションのオーガナイザーとして、「知ってるようで知らない!?～基準値の根拠を探る 2～ (2014 年度)」「リスク管理の歴史学 (2015 年度)」「身近で見過ごされてきたリスク 2 (2016 年度)」「日本水環境学会共同企画セッション：水系感染リスク研究の最先端 (2017 年度)」「価値と規範からリスク研究の深化と更新を問う (2019 年度)」「福島から COVID-19 を、COVID-19 から福島を考える (2020 年度)」「新型コロナウイルス感染症をめぐるレギュラトリーサイエンス (2020 年度)」「次期リスク学事典について考える (2021 年度)」「マスギャザリングイベントにおけるリスク評価・管理：検査とワクチンを事例として (2021 年度)」を企画、開催した。

	<ul style="list-style-type: none"> ・日本リスク研究学会誌・リスク学研究には、筆頭著者・共著者として 13 報の論文・原稿（総説論文、資料論文、情報、レター、書評、巻頭言）が掲載された。 ・「リスク学事典」では第一部第 1 章[1-5]を執筆した（平井祐介氏との共著）。 ・日本リスク研究学会「2017 年度奨励賞」を受賞した。
④ 研究歴・職歴等 (100 字以内)	東京大学大学院工学系研究科博士課程修了、工学（博士）。科学技術振興機構研究員、東京大学リサーチフェロー、特任助教、特任講師、福島県立医科大学准教授を経て 2021 年 8 月より現職（大阪大学特任教授（常勤））。

(書式 2) 【推薦者用】

① 推薦する候補者名	村上 道夫氏 大阪大学感染症総合教育研究拠点科学情報・公共政策部門 特任教授（常勤）
② 推薦者の姓名と所属	藤井 健吉 花王株式会社研究開発部門研究戦略・企画部部長（レギュラトリーサイエンス担当）
③ 推薦理由 (400 字程度)	<p>村上氏は、都市工学、水環境、基準値、放射線不安、メンタルヘルスと意思決定、新型コロナウイルス感染症対策リスク評価の各分野で、驚異的な研究業績を挙げており、査読論文数は 180 報を超える。日本リスク学会では、レギュラトリーサイエンス TG から「基準値のからくり（講談社ブルーバックス、2014）」を筆頭著者として世に問うなど、一般市民向けの書籍や講演、国際会議での提言も多い。新型コロナ対策では定量的感染リスクアセスメント法の開発をリードし、東京オリンピック開会式の感染リスク評価・対策有効性評価として発表、学術と社会実装の両面から貢献した。本学会では 2020 年より理事を務め、学会誌「リスク学研究」の編集委員長としてリスク学分野の多様な研究論文を扱う査読論文誌の改革（特集号企画や編集委員会体制の拡充等）にイニシアティブを発揮した。直近の「リスク学研究」の論文誌面の充実と速報性は、リスク学分野にとって喜ばしい活性化である。</p> <p>今後、日本リスク学会の社会との協働を、学術発信と社会発信の両面から支える中心的人財として、村上氏を当学会理事に強く推薦する。</p>